

# 卯年にちなんで



上野動物園 園長  
小宮 輝之

## ウサギの耳

皆さんはウサギという動物にどんな印象をお持ちでしょうか。ウサギのなかまは肉食動物や猛禽類に狙われ、油断すると餌食になってしまう弱い動物です。夜行性で昼間はやぶや穴の中で過ごしています。野山にすむノウサギも昼間は草むらでじっとしています。草刈りなど人間が近づいてきても、目の前に来るまでは動きません。踏まれそうな位置にまで近づいて、はじめてノウサギが足元から飛びだし、一目散に走り去ります。こうした行動の観察から「脱兎のごとく」という言葉が生まれたのでしょうか。

さて、ウサギが走るとき、耳は立てているのでしょうか、ねかせているのでしょうか。よく漫画などで、ウサギが耳を風になびかせるようにねかせて、まさに脱兎のごとく走り去る場面に出くわします。絵画などでも耳をねかせて走るウサギを目にしますね。実際には、ウサギが走るときは、耳を立てています。ウサギの耳は敵の存在を知るアンテナの役割をしています。タカの羽音やキツネの足音などわずかな物



大きな耳をもつジャックウサギ



走るノウサギ

音も聞き逃さないよう、アンテナである耳を立てて走るので。

耳にはもう一つ大事な役割があります。長い耳は体からとび出していますから、気温の影響を受けやすい器官です。だから耳で体温調節をするのです。

ウサギの耳を見ると、すくて血管がたくさんとおっているのが分かります。この耳の血管をとおり血液量を調節して、皮膚の表面から熱を逃がして体温を下げています。砂漠のウサギであるジャックウサギは巨大な耳を持ち、ここから熱を逃がし体温を下げています。一方、北極にすむホッキョクノウサギは熱を逃がさないように、全体が毛に覆われた短い耳を持っています。汗腺の発達していないウサギにとって、耳はラジエーターの役割をする大事な器官なのです。

## カイウサギとノウサギ

かちかち山、因幡の白兔などの昔話に登場するウサギは、皆さんの見慣れたウサギ、つまり家庭や学校で飼っているカイウサギではありません。日本に



アナウサギ

はじめてカイウサギが渡来したのは室町時代と言われている。江戸時代になって長崎出島のオランダ人が殖やして、売り出し各地で普及したようです。

日本にカイウサギが来るまでは、日本人にとってウサギと言えば、野山にすんでいるノウサギのことでした。鳥羽僧正の鳥獣戯画でカエルと遊ぶウサギも、ノウサギです。それがいつのまにか、ウサギはカイウサギをさす言葉になり、それまでウサギと呼ばれていたほうはノウサギと呼ばれるようになったのです。

ヨーロッパには昔からカイウサギの祖先であるアナウサギとノウサギの両方が生息していました。人々はこの二種を別の動物として扱ってきました。だから英語でノウサギはヘア、カイウサギやアナウサギはラビットと、別の名で呼んでいるのです。

### ウサギの子育て

ウサギが子供を産んでしまったけれど、どうしたらよいですかという問い合わせがときどき寄せられます。皆さんの飼っているウサギは赤裸の子を産んで、巣のなかで育てます。巣をつくる環境を準備しておかないとケージの床に子を産んでしまい、子育てを放棄することがあるのです。

てを放棄することがあるのです。

カイウサギは地中海沿岸地方にすんでいたアナウサギを家畜化したものです。アナウサギは地中に穴を掘ってつくったトンネルの中に巣をつくります。カイウサギも巣をつくらないとうまく子を育てられないのです。出産が近づいた母親は自分のおなかの毛を抜いて巣に敷きつめます。約三十日の妊娠期間で産まれてくる子は赤裸で目もあいていません。体重五g程度の人の親指くらいの大きさですから、親が子育てをしないからと言って、人が代りに育てるのは大変に難しいのです。

初夏のころになると、生後間もないノウサギの子が保護になります。草刈などをしていいると草の根元にじっとしているノウサギの子が見つかります。見つけた人は親からはぐれて迷子になった子と思い、動物園に持ってきてしまうのです。ノウサギの妊娠



生まれたばかりのノウサギの子

期間は約四十五日で、子は産まれたたでも体重が百g前後あり、毛も生え、目もあき、歯まで生えています。ちょうど親のミニチュアといった状態で産まれてくるのです。

ノウサギはウサギのようなトンネル状の巣を掘りません。地面のくぼ地や草の根元などに子を産み、母親はすぐに巣を離れてしまうのです。でも、草むらに子だけにいる小さなノウサギは迷子ではないのです。ノウサギは生後間もない子を茂みなどにおいて、母親は離れたところにいます。母親は一日に一〜二回哺乳のために子のところに行って来るのです。

ノウサギの子にとっては、タカ、テン、キツネ、ヘビなど、すみかのまわりは天敵だらけです。もし、まだ十分に走ることもできない時期に親について動きまわっていたら、すぐに見つかってしまいます。生後一週間日くらいは、母親が茂みに隠れている子



冬になると真っ白になる本州の豪雪地域にすむノウサギ

のところに通います。子は脚力に自信がついてから、母親について行動するようになるのです。これがノウサギにとって一番安全な子育て法なのです。

同じウサギでも、子育ての方法は、こんなに違います。多くの生き物は、それぞれの生活環境に合わせて多様な生き方をしていいるのです。人間も環境に合った多様な暮らしで、地球上のあらゆる地域に進出しました。卯年に当たり、私たち人類もウサギたちのように環境に合わせた生活をする時代かもしれませぬ。